

「オネエ所長の調査ファイル」 # 1 4

山崎浩治

1

「足の速い女の子とピアノが上手な女の子、どっちが好き？」

「何ですか所長、その二択は」

「トオルちゃんの女の好みを知りたいの」

「オレは足の速い女の子ですかね」

「それじゃ世界にマツコ・デラックスとあたししか女が残っていなかったら、どっちと結婚する？」

「うわっ、そんな世界には生き残りたくないですね……ていうか、どっちも男じゃないですか！」

午後9時過ぎ、住宅街にあるコンビニ前で「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が張り込んでいる。金沢市に住む専業主婦の光子(72歳)から「主人に暴行した不良を見つけてほしい」という依頼を受けて、事件現場となったコンビニ店にやってきたのだ。

大企業の部長職を勤めた夫の勲(75歳)は15年前、定年を機に生まれ故郷の金沢に帰ってきた。以来、悠々自適の生活を送ってきたが、半月ほど前の深夜、買い物に出かけたコンビニ前でたむろしている中高生と思しきグループに注意したところ、中の一人に胸ぐらをつかまれて突き飛ばされたのだ。幸いケガはなかったものの、勲は「私に暴力をふるった不良を警察に突き出し、その親には子育てがどうあるべきか、みっちり教えてやる！」と怒りが収まらないのだ。

この夜の市山は金髪ロングヘアのカツラを被り、背中に「愛羅武勇(アイラブユー)」と刺繍が入った特攻服を着て女装している。深夜徘徊する未成年者たちから情報収集しやすいように、`スケバン、`をイメージしてきたようだ。コンビニ前でしばらく様子を見てみると、数人の若者が駐車場に座って店で買った缶コーヒーを飲みながら何やら話し始めた。不良というほど禍々しい雰囲気はなく、笑い声にも幼さがにじむ。市山がすたすたと彼らに歩み寄り、気軽に声をかけた。

「ねえねえ君たち、足の速い女の子とピアノが上手な女の子、どっちが好き？」

2

「ご主人に乱暴した相手の身元を突き止めたわよ」

数日後、市山は「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに光子を呼んで報告した。夜間のコンビニに数日通り詰めた市山はそこを溜まり場とする若者たちとすぐに打ち解けて、さまざまな情報を聞き出すことに成功していた。ダンディーなスーツ姿で `男、`に戻っている市山が光子に言った。

「相手は近所の中学3年生。でも、ご主人がというような不良ではなかったわ。むしろ、ひ弱そう

な優等生よ」

少年の父親は長年、大手企業の下請け工場を営んできたが、親会社から何の前触れもなく契約を打ち切られ、倒産の危機に瀕していた。重苦しい雰囲気の中、自宅から抜け出した彼はくだんのコンビニで友人たちと待ち合わせ、志望していた私立高校への進学が経済的に難しくなったことなどを打ち明け、今後の進路を相談していたらしい。そこへやってきた勲が「子どものくせに、こんな夜遅くに何をしている！ 家に帰ってさっさと寝ろ！」と頭ごなしに怒鳴りつけ、鬱憤がたまっていた少年が反撃したというのが真相だった。

「ちなみに少年の父親が経営していた工場はご主人が定年退職した会社の下請けだったらしいわ。ご主人を突き飛ばした彼も悪いけど、事情もよく知らずに叱りつけた方もちょっと大人げないわね。そもそもご主人は相手が見るからに不良だったら注意してたのかな」

光子の表情に困惑の色がにじんだ。

「そうそう、ちょっと調べさせてもらったけど、ご主人は界わいで有名なクレーマーだそうじゃない？ 行く先々のコンビニやスーパーの店員相手にしょっちゅう難癖つけてるって評判だったわ。今回の一件もクレーマーの本領発揮というやつかしら」

顔を伏せて唇を噛む光子に、市山が言った。

「あたしが少年の名前を教えたら、ご主人は警察に訴えるの？ もしそのつもりなら、彼の名前を教えない。もちろん、調査料だって要らないわ。札付きのクレーマーに加担するのはあたしの主義に反するからね」

光子が顔を上げた。心細そうな表情がさっと怖い面持ちに変わっていた。

「だから私は調査を依頼することに反対だったのよ！ だけど夫が調査を頼め、と命令するから依頼しただけ。もし夫がその中学生を訴えるなら、その時は私、離婚するわ！」

3

長いサラリーマン生活で培ってきた経験やノウハウを生かそうと定年後、再就職を希望したものの、ハローワークで60歳以上で就職できる職種を探すと、ほとんどが清掃員や警備員、駐車場の管理人だった。大企業の部長まで務めたこれまでのキャリアを全否定されるような再就職に我慢ができず、勲は悠々自適の生活を送ることにした。

貯蓄はそこそこあるし、親が遺してくれた家は退職金でリフォームしている。年金額も十分とはいえないまでも、人並みに暮らすには不足がない。人から見れば幸せな老後だろう。けれど、心ゆくまで朝寝坊できる「毎日が日曜」が楽しかったのはほんの数日だけだった。

毎日毎日、その日やることを探す日々に嫌気がさし、何か生きがいを見つけようとシルバー人材センターの仕事をしたり、趣味サークルに顔を出したりしたものの、元来、これといった技能や趣味があるわけではなく、どれも長続きしない。ずっと転勤族だったので、地元で親しい友人もいなかった。

せめて女房が話し相手になってくれれば、多少は無聊を慰められただろうが、家事や趣味の付き合いで忙しい光子は亭主の話を「はいはい」とうるさそうに聞き流すだけ。息子と娘は父親に

反発し、大学を出るとさっさと独立して、結婚も事後承諾。いまではともに県外で暮らし、親子関係は絶縁同然だった。

ひまを持て余し、散歩がてら近所のスーパーに買い物に出かけた時、商品名と金額を読み上げるレジ係の声が小さいので「客に分かるようにもっと大きな声で言いなさい。愛想も悪い」と懇々と諭したところ、女性店員は案外、素直に謝罪した。勲の話を誰かが真摯に耳を傾けたのは久しぶりのことだった。

その時、世の中というのは会社と同じだな、と気付く。注意深く観察すれば、至るところに問題点が転がっており、それらを発見した時、見過ごすことなく、そのつど改善策を示してやれば、世の中はますます良くなる、と確信したのだ。

その日から身近な改善提案を「定年後の使命」と考えるようになった勲は現役時代と同じようにスーツを着用し、スーパーやコンビニ、病院、銀行などを足繁く巡回するようになる。そしてスタッフの立ち振る舞いなどに不備を見つけるや、すぐさま「ちょっと君、仕事中に何をしゃべっているんだ。しっかり仕事しなさい！」「人間のやることだからミスは仕方ないが、その態度は一体どういうことだ！」「君はここで何年働いている？　どんな教育を受けているんだ？」などと細かく注意するようになる。

相手が黙って聞いてくれるのを見ると、部下や出入り業者を相手に弁舌をふるった管理職時代の心地よい高揚感が蘇る。勲は相手を叱責した際、最後にこう付け加えるのが常だった。「なんなら私が指導してあげようか。私は40年近く勤めた会社では社員教育のプロだったんだよ」と。

4

「定年になって、一日じゅう家にいる夫は『こうすれば家事の効率がよくなる』といちいち命令口調で指図してくるのよ。自分はリビングのソファでゴロゴロしながらね。仕事一筋の会社人間だったから、料理の一つも満足に作れないくせに！　あの人にとって私は妻というより、部下。こんな生活はもう、うんざり！」

光子はダムが決壊したように夫への不満をぶちまけ、オフィスを去っていった。その翌日、スーツの肩をいからせ、とげとげしい空気を漂わせた勲が「金沢プライベート・リサーチ」に現れた。

「女房が中学生を訴えたら離婚する、と言っている。これは一体どういうことだね！」

大声を出す勲に、市山がやんわりと答えた。

「奥さんは本気よ。近所で悪名高いクレマーのあなたとの生活はもう限界なんだって」

「何がクレマーだ！　私は間違ったことなど言っていないぞ。世の中のためによかれと思って注意してただけだ。それなのにクレマー扱いされるのか！」

「確かにあなたは意識的に怒鳴り声を上げて相手をパニックに陥れ、その混乱に乗じて金品をせしめるタイプのストーカーじゃないわ。でもね、お客のあなたをむげにできないお店に対し、些細なことで責め立てるのは立派なクレマーよ」

「しかし今回は話が違う。相手の不良は私に暴力をふるったんだぞ！　これは立派な暴行罪じゃ

ないのか！ 私は正論を言っているだけだ！」

市山が大きくため息を吐くと、続けた。

「あなたはそうやっていつも正論を振りかざしている。けど、正論は時と場所、相手を選ばないと愚論になってしまうの。正論も暴力になるってことをよく知ることね。このままクレマーを続けていたら、あなた、本当に一人になるわよ」

市山がピシヤリと言った瞬間、勲の肩はつかえ棒が外されたようにガクンと落ちた。

5

妻から離婚話を切り出されたのがよほどショックだったらしく、勲は少年を訴えることなく、クレマー行為もぷつりとやめた。市山に電話でそう報告してきた光子が「あれから私が外出するたび、『どこへ行く？ 何時に帰る？ オレも行く』って、うるさいったらありゃしない。あげく、私の行くところ、どこでもついてくるのよ」と愚痴る。

「クレマーの次は、家庭内ストーカーになっちゃったんですか」

呆れて苦笑する透に、市山が言った。

「クレマーには定年がないわ。だからこれから `高齢者クレマー、がますます増えていくでしょうね。でもね、高齢者には若い世代に伝えるべき経験や知恵があるのも確かな事実。 `伝え方、をよく考えることが大切なのよ」

それから半年後、市山と透が勲の様子を見に向かった。ツイードのスカートとベージュのコートで良家のお嬢様風に女装した市山が透に尋ねた。

「そういえばトオルちゃん、 `片町のシンデレラ、の調査以来、スナック香澄によく通っているんだって？ アヤカっていうバイトの女の子が気に入ったんでしょ」

「そんなことないですよ！」

ムキになって否定しながら、透が真っ赤になったところを見ると、市山の指摘は的中したようだ。そういえば「スナック香澄」のアヤカは足の速そうな、しなやかな女の子だったな、と市山はふと思う。

一方、勲は自宅近くのスーパーで買い物する光子のあとを金魚のフンのように付き従っていた。無精ひげが目立ち、うつろなまなざしでカートを押す勲からはクレマー時代の傲岸不遜な面貌は影を潜め、ただのしょぼくれた白髪頭の老人に一変していた。

「 `老いては妻に従え、の光景ね。ちょっと哀れを誘うけれど」

市山の言葉に、透が「ですね」とうなずいた。

その後、勲は足腰がめっきり弱くなって光子の介助なしに外に出られなくなり、昼間はリビングのソファにちょこんと座ってテレビをぼんやり眺める毎日を送るようになる。日常生活にも支障を来すことが増え、妻の勧めもあってデイサービス施設に赴いた際、職員から「みんなと一緒に童謡を歌いましょう」と促された勲は「私は童謡など歌いたくない。なぜ童謡なのだ？ 年寄りだと思ってバカにするな。どうせなら演歌を歌わせなさい！」と一悶着起こす。それは勲が久しぶりに発したクレームだったらしく、その時の表情はいつになく輝いていたという。